Kobe University Repository : Kernel

Title	彙報 : 平成24(2012)年度海港都市研究センターの活動
Author(s)	藤田, 裕嗣
Citation	海港都市研究, 8: 97-99
Issue date	2013-03
Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	publisher
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81004820

Create Date: 2013-06-05

彙報

平成 24（2012）年度　海港都市研究センターの活動

平成 24（2012）年度の神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センターは、国際シンポジウムを共催してきた例年の事業を継続するのみならず、昨年度に引き続いて、新規の事業へのアプローチを試みた。人文学研究科への改組以来、担ってきている二つの授業科目への連関性を持たせようとした試みについては、後述する。さらに、例えば、一昨年度末で終了した文部科学省・大学院教育改革支援プログラム「古典力と対話力を基礎とした人文学教育」の後継である共同研究組織「古典力･対話力プログラム」などと連携して、海港都市に関するコロキウムや研究会を組織・運営するなど、研究面の拡充を図ったことは、その一例と言える。ちなみに日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」との連携については、共催した国際シンポジウムの会場が海外であった例年とは違い、今年度は国内であったため、派遣する院生の応募はできなかったが、別の形で生かすことにした。詳細は、後述する。

(1) 人文学研究科共通科目の実施状況

①海港都市研究＜前期＞

都市神戸の現場で「越境者」に関わる活動を行っている方々と、海港都市その他を舞台とする越境文学について紹介できる人文学研究科の教員を講師とし、多角的な視点から海港都市の生活・文化の在り方を明らかにすることを目指した昨年度の実績を踏まえつつ、今年度は、「『海港都市』神戸の歴史と文化交流」をテーマに掲げ、新しい試みとして、現地の巡検と神戸市立博物館における展示の熟覧（解説付き）をも取り入れた。

今年度は、前半と後半とに大きく分けた。前半は、海港都市神戸の淵源をなす兵庫津を中心に、その形成過程を辿るのに対して、後半では、その発展として、神戸が開港された後、諸外国との文化交流そのものに注目した。一貫して、神戸における越境者による文化交流の諸相に関し、オムニバスの形で講義をさまざまな角度から展開することに努めた。後半は、昨年度における成果を踏まえたものであり、主に前半で、歴史的な過程を抑える形で新しい論点をも取り入れた。

講師陣としては、当人文学研究科の教員などを中心に、博士課程後期課程に進んで、博士号を取得した若手研究者をも含めた。その狙いは、受講生は、博士課程前期課程に進んだ現役の院生であるが故に、自らの卒業論文や教育研究分野における研究状況を踏まえながら、海港都市研究センターが院生に対して提案してきた「海港都市研究」へと誘う点に置いた。修士論文を提出した後、博士課程後期課程に進み、国際シンポジウムにおける発表への意欲を啓発する意味を込めたものであって、数年後を見据えたプランと言える。出席者は毎回十数名程度であって、今年度に蒔いた種が、２年後、３年後に結実するか、期待している。

②海港都市研究交流演習（海港都市研究交流企画演習）＜後期＞

例年同様、大学院生が専門分野の枠を越えて横断的に議論するなかで、自らの研究を学際的・国際的な視点から見つめ直し、同時に研究の意義を有効にアピールする能力を養うことを目的として開講した。なお、本演習は 12 月に長崎大学で開催した国際学術シンポジウム「東アジア交流圏の構想と海港都市の経験」（詳細は後述）の準備報告会も兼ねた。演習では、事前に公募した報告予定者が、自身の研究発表を行い、教員や他の受講生と議論を行うことを通じて、学際的な場でも自らの研究の持ち味をより効果的に伝えることができるような心構えを身に付け、プレゼンテーションに関する技術を伸ばすことができた。最後に、国際学

術シンポジウムにエントリーしていない受講者も自身の報告を行い、専攻を問わず集まった教員・受講者と相互に議論した。

なお、今年度は、国際シンポ本番の直前に参加者の発表内容を学内で開陳する機会を提供し、参加者以外にも披露できるよう、試みた（後述する「海港都市研究会」の形）。院生は、演習で相互に発表内容を確認できるが、研究会では、本番における分科会の順序を原則としたことで、同じ分科会に宛てられた教員による発表も確認できて、発表内容に工夫を加える契機となった。会場のプレゼン室で一時期、椅子が不足する事態を危惧したくらいの参加者が得られた。今後とも継続すべきと思われる。

(2) 学際的かつ国際的な研究交流

①第８回海港都市国際学術シンポジウム「東アジア交流圏の構想と海港都市の経験」

2012 年 12 月 15・16 日、長崎大学において、国際学術シンポジウム「東アジア交流圏の構想と海港都市の経験」が開催された。これは、「海港都市」にまつわる諸問題を多角的に考察するため、アジア圏の研究者が国境や専門分野を超えて意見交換を行い、大学院生同士の研究交流を目的とするもので、今回で８回目となる国際学術シンポジウムである。今年度の主催大学は、国内の大学では本学以外に初めて長崎大学が当たり、次回の開催校である木浦大学校からも教員３名による研究発表が得られた。そして、教員３名、大学院生５名が研究発表を行った本学に加え、韓国海洋大学校、宜蘭大学と台北大学（いずれも台湾）、長崎県立大学などからの参加者による研究発表が行われた。

分科会方式が採用され、最後は「総合討論」に１時間を宛てて、それまでの研究報告を踏まえた形で議論を戦わせ、今後の研究の展望を探った。今回は、長崎大学の希望で、「近代東アジアの境界文化と長崎」と題した国際ワークショップが平行的に開催されたのも、新しい試みであった。

②海港都市研究会

昨年度より「海港都市研究会」として、本研究科の博士号取得者や内外の研究者が研究内容を報告して教員や大学院生らと意見交換を行う場を設けたが、今年度も引き続き、開催に努めた。今年度の開催実績は以下の通りである。

第１回海港都市研究会

日時：2012 年 12 月 5 日（水）13：30-16：45

場所：C262 プレゼンテーションルーム

発表者と発表題目

13：30-14：50

藤田裕嗣「東アジアに開かれた海港都市としての兵庫・神戸と長崎との比較」

連興檳「中国の『城中村』における都市移住者の定住意識――深圳市笋崗村を事例として――」

蘇紋槿「台湾の『319 郷向前行』活動をめぐる考察」

15:00-15:45

川口ひとみ「長崎訴訟関係史料からみる近代日中領事裁判権の運用」

添田仁「近世長崎の密貿易と港市社会」

16:00-16:45

朝治俊輔「密輸とともに生きる――19 世紀コーンウォール地方の港町と非合法交易――」

奚伶「20 世紀初頭の清国における日本財政制度導入の一側面――銭洵の『財政四綱』を例に――」

主催：神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター

［要領］各発表者の発表時間は、本番と同様 20 分。まとまり毎に質疑の時間を設ける。

第２回以降の海港都市研究会は、３月、４月に予定しているが、まだ準備段階であり、詳細については、来年度の彙報の機会に委ねることとする。

③海港都市研究コロキウム

日時：2013 年 1 月 25 日（金）17：30-19：30

場所：A 棟学生ホール

発表者：葉柳和則（長崎大学環境科学部教授）
発表題目：「近代的想像力の外部へ――青来有一による長崎表象の思想的水脈――」
主催：神戸大学大学院人文学研究科
共催：神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センターと古典力・対話力プログラム

12月の国際シンポジウムでも披露されたテーマではあったが、その折は僅か20分程度の持ち時間であったのに対し、今回は、たっぷり1時間程度のご報告に対して、質疑応答にも約1時間をかけ、議論を深められた点で有意義であった。出席者も、院生のみならず、卒業生にまで及び、学生ホールが一杯になっている感があった。さらに、質問でも、皮切りに前期課程の院生から始まって、活発な議論が展開できた。

(3) 国内外の大学との連携

長崎大学環境科学部葉柳和則教授と本センター副センター長藤田裕嗣教授は、昨年度の台湾での国際シンポ以来、意見交換する機会を何度か持ち、長崎大学内の研究プロジェクト「持続可能な東アジア交流圏の構想に向けた人文・社会科学のクロスオーバー」と本センターとによる連携体制を模索した。具体的には2012年3月に長崎大学で開催された記憶をテーマにしたシンポジウムに本学から教員・大学院生が招聘参加した成果に基づいて、12月に上述した国際シンポジウムの開催に漕ぎ着けた。さらに、上述した1月のコロキウムも、その一環として位置付けられる。

なお、予算の関係で昨年度は開催を見送らざるを得なかった資料収集・研究交流会は、残念ながら今年度も、実現できておらず、今後の課題としたい。

さらに、昨年度の第2回海港都市研究会で講演していただいたオックスフォード大学ウェルカム医学史研究所の教授・M. Harrison氏は、医学史を専門とするが、2011年11月に神戸大学大学院人文学研究科とオックスフォード大学ハートフォードカレッジの間で締結された学術交流協定とも連携して、本センターとウェルカム医学史研究所との交流を深めている。今年度は、その一環として、藤田が日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の予算によるロンドン出張中に、同研究所を訪問して、信頼関係を確認するよい機会となった。

(4) 研究成果の発信

①紀要『海港都市研究』の刊行

2013年3月、海港都市研究センター紀要『海港都市研究』第8号を刊行した。すなわち、本号である。第8回海港都市国際学術シンポジウム「東アジア交流圏の構想と海港都市の経験」の本学院生の報告要旨に加えて、シンポ参加者である傅雋氏と王景智氏の論文、黄錦樹氏の論文、兒玉州平氏からの投稿論文を収録している。

②海港都市関係資料の調査

今年度も継続して附属図書館との共同作業を進めた。

（文責：藤田裕嗣）